



編集・発行 邑楽町役場企画課
〒370-0692 (住所記入不要)
☎ 0276-88-5111 (代表)
☎ 0276-47-5007 (企画課直通)
☎ 0276-89-0136
URL <http://www.town.ora.gunma.jp>
E-mail koho@town.ora.gunma.jp

邑楽町携帯サイト
2次元コード対応の携帯電話は、右のコードをご利用ください。読み取りができない場合はURLをご入力ください。
携帯用URL <http://www.town.ora.gunma.jp/k>



〈第十四回〉

若い人たちに語り継ぎたい、
次の世代に残しておきたい。
貴重な話をお届けします。

あすへひとこと

「邑楽町の昔ばなし」より

鶉うずらの里の由来



鑿阿寺（ばんなじ・足利市家富町所在）は、足利義兼が建久7年（1196）に守り本尊として、大日如来を祭ったのが始まりといわれています。

昔、八幡太郎義家の孫に、義重という武将がいました。この人の領地は新田の庄で、義重は新田氏の先祖です。義重の弟、義康は足利の庄にいて足利氏を名乗り、足利氏の先祖であります。その義康の子に義兼という武将がいました。義兼は足利氏の二代目になります。やがて鎌倉の源頼朝の家来になり、頼朝の奥方、政子の妹・時子と結婚しました。

義兼公はウズラの鳴き声が大変好まれ、ウズラを愛され、金の鳥籠で飼っていたそうです。この辺りでは鳥籠のことを「さしこ」といいます。もちろん餌や水くれ、さしこの掃除などは奥女中たちの仕事だったでしょう。そんなある晩、義兼公はウズラが悲しそうに、「金のさしこで飼われるよりも、自由に野山で遊びたい」と、泣いている姿を夢に見ました。

義兼公は後に、仏門に入り、足利の鑿阿寺（ばんなじ・大日様）を開いたほどの心の優しい人でしたから、翌朝早速奥女中に、「このウズラが、自由に住める安全な『野』を見つけて放つてやれ」と、命じました。

奥女中のなかに中野の里の近くの者がいました。彼女は『野』と聞き、「それなら自分の郷里の近くに中野の里があります」と、申し上げてお許しを受け、早速郷里に持ち帰って放してやりました。それから鳥を放してやった場所を「鶉」と呼ぶようになったといえます。村人はこうしたわけで「鶉」の地名は足利義兼公が付けた、と言い伝えられています。

義兼公から六代後の子孫が足利幕府を開いた足利尊氏だと書物には書かれています。ちなみに、義兼公の墓地には足利氏三代目の義氏が八幡宮を祭りました。足利の鑿阿寺の奥の院に当たるそうです。八幡宮は現在も足利市榊崎町にあります。ウズラが飼われたという金の鳥籠は、明治の始めまで、八幡宮で保存していたそうですが、今はそのものはなく、原形にまねて真ちゅうで作られたものが保存されています。

ところで、義兼公が飼われたというウズラには、次のような話もあります。ある年、鎌倉から領地の足利の館に帰る途中、現在の鶉で最後の休憩をしたところ、コキッチョウ・コキッチョウと、よく鳴くウズラの声を目にし、聞きほれてしまいました。義兼公にはコキッチョウと鳴くウズラの声が「克吉兆」と聞こえました。義兼公は喜んで、縁起の好い鳴き方をして義兼公を迎えたウズラを捕らえて、奥方の土産にしたということでもあります。

ずっと後のことですが、旅人が江戸に向かう途中、団子見堂の前で休みながら、ウズラの鳴き声を聞いて弁当を食べた、といえますから、確かにこの辺りはウズラの良い住み処だったのでしょう。

【発行】邑楽町老人クラブ連合会 【編集】あすへひとこと編集委員会
平成10年12月31日発行「高齢者の語り(第六集)あすへひとこと」より



見上げると
満開の桜花
(八王子神社)



Photo 根岸定男(記録ボランティア)

ひとりとこと From editors

▶4月が慌ただしく過ぎさっていきました。私の異動はなく、相変わらず広報おうらをつくり続けることになりました。町民の皆さんには、今年度も取材などでお世話になるかと思えます。どうぞよろしくお祈りします。▶小学校の入学式や幼稚園・保育園の入園式へ取材に伺いました。初々しい子どもたちの笑顔を見ていると、ココロも何だかほのぼのします。入学式で「あっカメラマンだあ!!」と言ってくれた子どもたち。よく見ると見覚えのある顔ばかり、幼稚園・保育園で写真を撮った園児たちがもう小学生に…。覚えていてくれてありがとう。「今月号の広報よかったよ」、「いつも写真がいいよ」など、皆さんからの優しい言葉も今日の励みとなり、明日の糧となっています。(小林)